

「じゃがいものうち」通信 NO.55 2007.12.11

～障害者と共に生きる仲間たち～

NPO法人「じゃがいものうち」

〒891-4404 鹿児島県熊毛郡屋久町尾之間136-6

Tel./Fax/0997-47-3588 E-mail/npo-jaga@po.minc.ne.jp

URL: <http://www.minc.ne.jp/npo-jaga> 代表 松田 正

じゃがいものうちの目指すものパート

今までの福祉と言えば、障害者の施設だと障害者ばかり、高齢者の施設だったら高齢者ばかり。考えてみれば、ちょっと変ですよ。社会にはいろんな人が一緒に生活しているのに。

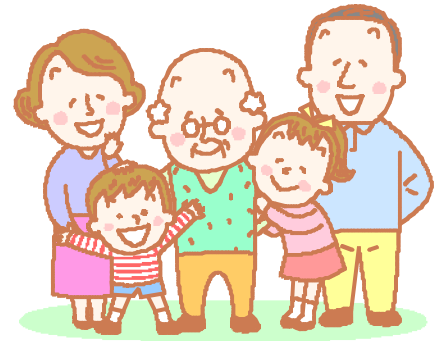
赤ちゃんもいて、働いてる人もいて、じいちゃんやばあちゃんもいて、障害を持った人もいて、支え合って生きている。一昔前の大家族がそんな生活だったように思う。赤ちゃんは笑顔を振りまきみんなを優しくさせる。じいちゃんばあちゃん

は子供の相手をしたり、若者に昔のこと話してくれたり、障害を持った人も仕事をしたり話し相手になったり、みんながそれぞれ役割を持っていて、役割があるからこそ生きる喜びとなり、みんながいきいきと生きていける。そんなかたちが出来れば、子供から大人、高齢者へと連続したつながりとなり、未来につながる事が出来る。ところがいろんな理由で核家族化してしまった現在、そのつながりがあちこちで切れてしまい、いろんな支障が出てきた様に思う。

介護保険は家族の介護力が無くなってきたために、社会で高齢者を支える制度として生み出された。制度に頼らなくてもその前から、宅老所とか、富山型などの仕組みが生まれてきたのも、そんなつながりを求める気持ちも含んでいるのではと思う。

「じゃがいものうち」は、昔の大家族とは違うけど、いろんな人が寄り添える場所、次の世代へとつながりの持てる場所、そんな“みんなの家”を目指しています。

(松田)



第3回 地域共生ホーム全国セミナーin富山」に行っちゃいました。

『誰もが支えられたり、支えたり、「共生」とはどんな人でも排除しないで包み込むこと。赤ちゃんからお年寄りまで、一つ屋根の下で過ごしている。その人なりの居場所があって、一人ひとりが輝いている。いつでも、いつまでも利用出来る家、そんな居場所を考えてみませんか?』

これがセミナーのパンフレットの表紙にあった言葉です。国や県は「在宅」と言うけれど、「今の状態で、本当に地域で暮らしていけるのだろうか。誰もが安心して地域ですずと暮らすことが本当に出来るのだろうか。」ということを考えあう目的で開催されました。

【地域】

例えば難病をかかえる人は「在宅」で暮らすとなると、介護の負担が大きすぎます。「福祉施設」となると、医療処置をうけている人は入所が困難な状況にあります。では「病院」となると、長期入院は病院の経営を圧迫する状況になり難しいでしょうし、特殊疾患療養病床（重度で長期療養が必要な人が入院出来る病棟）という制度も廃止される予定だと言います。となると「病院」も難しい。「じゃあ私たちはいったいどこに行けばいいの?」「これで本当に地域で暮らしていけるの?」というのが現実のようです。でも偶然「障害」や

「難病」をもってしまっただけで、本当は「普通に暮らしたい」と思っている。どうしたら地域で暮らすことが出来るでしょうか。

「地域」には暗黙のルールがあります。それは「他の人に迷惑をかけない」というものが、人の意識の中にあります。ところが、それが「地域のカベ」を作っているのです。その「地域のカベ」を破るには、地域へ正しい理解を求めること。つまり、地域が正しい知識を持つことが必要なのです。そのためには、病や障害を持つ本人が声を上げることも必要でしょうし、地域で暮らす人が、その地域で「生きづらい」と感じている人をどう支えていけるのかを考える必要もあり、地域がそれを課題として捉え、そのことについて行政がどのように働きかけ、サポートするかを考えていく必要もあります。では地域の人に、どうしたら理解してもらえるのでしょうか。

家族というのは、偶然の出会いです。もし障害があったとしても、そのことと長く付き合っていかななくてはなりません。だから互いにそのことに慣れたり、あきらめたりしながら生活していくでしょう。しかし「慣れる」ためには、ともにその場を「共有」することが必要であり、それがないと「慣れる」ことはないのです。そしてその場を「共有」することが、「理解」へつながっていくのではないのでしょうか。

地域を変えていくのは「地域の力」であり、それは一人ひとりの積み重ねでもあるのです。同時に、地域に変わってほしいと思うならば、自分も変わっていかなければなりません。言い換えれば、「自分も変われば、地域も変わる」と言うことなのです。それには、自分の障害を「受容する」ことが大前提で、それができて、次に地域もそのことを「受容する」ことができるのです。そして自分のことを理解してもらいたいと思うのであれば、相手のことも理解しなければなりません。それが、互いに相手を理解するということなのです。

地域の中で、お互いの「違い」を認め合い、分かり合い、違いを楽しんだりしながら暮らしていければいいのではないのでしょうか。



【共生】

「共生ケア」の定義は、『地域の中で当たり前で暮らすための小規模な居場所を提供し、利用者の求めに対して、対象上の制約をあたえず、多様な人間関係を「共に生きる」という新しいコミュニティとして形作る営み』である（日本福祉大学教授 平野隆之）。

なぜ、富山でこれほど大きく広がったのだろうか。国の事業というものは、厳しい制度の正しい運用を求めている。だから、介護保険法と老人福祉法の正しい運用をしなさいと指導される。そこに、対象外の人に加わることは「目的外使用」だからダメと言う。でも、老人と子どもと一緒にいた結果、元気になる人がいた。そんな風に幸せを感じる住民がいるのに、行政は制度の運用のみにとらわれてしまう。「無認可」イコール「良くないところ」と考えがちでもある。でも、もし「無認可」が良くないものとされるのであれば、今の富山型というものは存在しなかつただろう。富山は一点突破した結果、外部から良い評価を受けた。もし失敗していたら、そんなことは言われなかつただろう。良い実例は「力」になるが、行政が最初にそれを認めることは、大変勇気がいることでもある。もし事故が起きた時の、責任の所在が不安だからである。しかし「評判が良い」「効果が上がっている」と言う実例を作っていくことは大きな力になる。そして、1カ所に出来ると他でも出来る可能性が大きくなる。富山はモデルケースが山盛りだった。モデルを試してみることは、大変有効である。まず「共生」の第1歩として、境目を緩やかにすることから始めたらいいのではないか。それにはまず、「遊びに来ませんか？」と、誘ってみることから始めてはどうでしょうか。

【最後に...】

個人的感想として、富山はパワーに満ちあふれていました。言葉や文章は、本などを読み知識や学問として、富山に行かなくても知ることは出来ます。でも「空気を感じる」ことは出来ないと思います。そういう意味で、富山ですごした時間はまるで夢の世界の中にいるようでした。

うまくまとめられず、もっと伝えたいこともあるような気がするのですが、詳しくは「じゃがいものおうち」に資料や報告が置いてあるので、興味のある方はご覧下さい。（羽田 順子）

ジャガイモの種芋植えは気合いだ」の巻

10月28日(日)モッコム岳がそれはそれは美しく映える秋空の下、ジャガイモの種芋は、まるまるふとった、たくさんのこどもを作るために、畑の土に大事に大事にくるまれました。なんて言う、のどかな畑仕事に聞こえるけど、とんでもない！今年のジャガイモ作りは「気合いだ！気合いだ！気合いだ！」。今年は、作付け面積が小さかったために、例年よりも丁寧に植え付けをしました。その理由は、ここ数年「じゃがいものおうちブランド」として、すっかり定着してしまった痘痕(あばた)の芋を払拭させるためです。その痘痕の正体は「そうか病」という病気。連作や、土の性質や、ぐちゃぐちゃ度合いによって起こるらしい。(詳しくは農家の方に聞いて下さい。)しかし！今年こそ、つるつるお肌のかわいい芋娘を育ててみせるぞ！「じゃがいものおうち」のジャガイモは消毒液につけないために、人が体をはります。耕した畑の石ころや、雑草や、草のカスを四つんばいになって、1本1本取り除いていく。取っても取っても無くならない。「取っても」という言葉をあと10回は繰り返してもらいたい。そうだ、ここは雑草天国屋久島なのだ！体をはるのは、それだけではない。種芋を均等に並べて

いくには、中腰の横移動がポイント。腰も痛い、太股も痛い。種芋に土をかぶせる時は、足の内股の筋肉をリズム感良くキュッキュッキュッとよせる。キュッキュッキュッと、50M程進む。お尻の筋肉も結構使う。それに、全ての作業が下を向いたままだ。なにが美しく映えるモッコム岳だ！土の色しか見てないぞ！「まあいいじゃない、それだけ労働したら、少しスマートになったよ」って？とんでもない！誕生日とクリスマスと一緒に来たような差し入れのスイーツの数々。みなさんお菓子作りが上手なこと！私は、消費カロリーの10倍はとったね、間違いないね。

さて、春には、どんなジャガイモが育つか、楽しみ楽しみウッシッシ！皆さん、たくさん買ってね～(気が早い...) (鈴木裕子)

初めて「じゃがいものおうち」の作業に参加してくれた、堀口奈々香さん(よかたん豆腐店勤務、元気でかわいい女の子)から、種芋植え付け作業の感想をよせていただきました。鈴木のコナーとかぶっちゃったけど、同じギャルでも何かがちがうぞ！えっ！？同じじゃないって???

ジャガイモの種芋の植え付けをしました」

私は、午前中お豆腐屋さんでお仕事をしていたので、畑にいる皆さんのもとに着いたのはお昼でした。皆さんは、午前中ずっと草むしりをされていたとのこと。一緒にお昼を食べた後、残りの草むしりを私もさせてもらいました。肥料をまいた後、松田さんが耕耘機でうねを作って下さいました。そして、種芋を植えるための作業を始めました。ジャガイモを配る人、植える間隔を測る人、植える人、土をかぶせる人…。それぞれの仕事を分担して、たくさんの種芋を植えることができました。おいしいジャガイモを作るために、皆で、日差し強い中一生懸命作業をしました。秋だということにとっても暑くて、いただいた麦茶がとってもおいしかったです。四宮さんが、たくさん切ってきて下さったおりんごもいただき、とても元気が出ました。飯田かおるさんの手作りのお菓子や、ほかの方からの差し入れられたお菓子がとてもおいしくてうれしかったです。たくさんの方と知り合い、お話しさせてもらうこともでき、楽しい1日でした。ジャガイモはすくすくと育っており、2月末には収穫できるそうです。とっても楽しみです。 b (堀口 奈々香)



奈々香作

「たんぽぽの会」～子どもの個性をのばす会～の歩み

「たんぽぽの会」は2003年10月軽度発達障害をもつ親の会として、3人の母親で発足させました。

それから4年を経た今、会員数は12名となり、子どもの障害も軽度発達障害（AD／HD、高機能自閉症、LD）のみならず、広汎性発達障害、言葉の遅れ、軽度知的発達障害、脳性麻痺などさまざまです。月一回保健所や町の保健師さん、福祉課の方の支援を受けながら定例会を開いています。

「たんぽぽの会」を続けてきて思うのは、子どもの障害、その子を取り巻く状況、そこから来る苦悩、そして親の願い、すべてがみな特別であるということです。同じ診断名を持つ子どもであっても、性格はもちろん、あらわれてくる問題も様々です。軽度発達障害の場合、暴力的であったり、困った言動を繰り返す子と、自分の思いがうまく伝えられず、周囲の動きについていけない子は、同じコミュニケーションの問題を抱えながらも、ともすれば加害児、被害児という関係になることもあり得ます。そんな中で、我が子の障害と、自分の立場の苦しさからのみの発想を超えて、皆一人ひとり苦悩を抱える存在として、『共感し合う場』こそつくりたいと考えてきました。

今年で4年になりますが、メンバーが、近況について、自分の心情について、良く語り良く聴き、理解と共感を得るピアカウンセリング的な形を取っています。はじめて参加した人には存分に思いを吐き出してもらえよう、2、3時間かけてその人の話だけを皆で聞くこともあります。メンバー間では自分の体験を通して、子どもの学習の方法などについてアドバイスや情報交換も行われています。定例会の会以外にも、特別支援教育について、関係者の方々も交え学習会を行うようになりました。

また私自身も心理職として子どもの発達障害の相談・診断に関わる仕事をするようになりました。知的な遅れを伴わなくても目に見えない障害の存在が、自分でもどうしようもない生きにくさをうんでいるケースがふえています。子どもの努力の範囲をこえた様々な問題（学習、コミュニケーション、行動上のトラブル）は脳の伝達物質の分泌



異常や能力のアンバランスなどからきていることが少なくありません。

大人が「困った子」と捉えるとき、子どもも「困っている」状態にあるのです。暗闇の中で一人では道を見つけることはできません。そこに一筋の光を灯し、道を照らす存在が必要です。ただでさえ細く険しい道なのですから。

目に見えない障害ゆえ、親ならば誰でも「認めたくない」という気持ちを持って当たり前です。しかし、早いうちに子どもの特性を見抜き、子どもがどこに困っていて、どこに生きにくさを感じているのかを理解することは、その子にとっての大きな支えになり得るし、成長していくにつれ、自分の障害を受け入れそして乗り越えていく基盤になっていくことは間違いないと思います。

そして学校や地域社会においても静かにあたたく見守ってほしいと、切に願います。特別扱いと配慮はちがいます。その子の可能性の芽をつむことなく、うまく力が発揮できるような声かけや、かわりがいただけたら幸いです。軽度発達障害の問題は、人間が生きにくい、子どもを育てにくい現代の社会の中で、手探りで進むしかない問題だと思っています。それだけに私たち親も智慧と勇気を持って生きることを、子供の存在を通して教えられていると感じています。

一人で悩んでいる方、形にならないけど何か不安をかかえている方、お気軽に相談してください。親の会も微力ながら何かできることがあるかもしれません。

（佐藤 佳志子）

連絡先・保健所（母子係）

手をつなぐ育成会便り

日中活動の場を求めて始まった、週に1度(水曜日)行う『水曜活動日』。野菜、椎茸、時計草(パッションフルーツ)を作って市に出したり、小麦を育て、粉を挽き、うどんを作り、販売をしました。編み物、木工、蚊取り線香作りにも挑戦しました。そして、もう3年が過ぎようとしています。たった週に1度だけど、通ってくることの喜びは、子どもたちの大きな笑顔に表れます。だから、どうかもう少し活動できる日を増やせないものか、という思いから、夢の豆腐屋さん『よかたん豆腐店』を7月にオープンさせました。そして、いよいよ10月より「手をつなぐ育成会」の4名の子どもたちが出勤してくることになったのです。しかし、そこはまだ始まったばかりの豆腐屋さん。そこで働く店員さんと育成会の子どもたちのお互

いが慣れなければなりません。それよりともかく、初めはまともなお豆腐を作ることに精一杯!何もかもが一生懸命!大変なスタートとなりました。

月曜日:鹿島 浩二さん

木曜日:高見澤 信裕さん

金曜日:岩川 清美さん

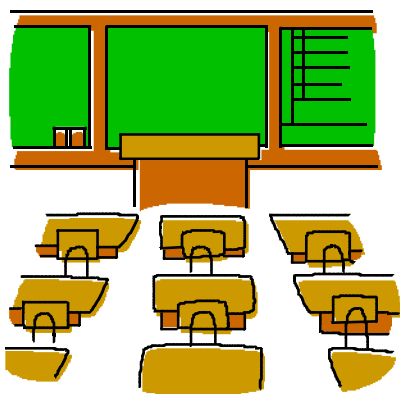
土曜日:岡留 千賀子さん

育成会の子どもたちの出勤が始まって2ヶ月になる現在は、仕事にもすっかり慣れ、職場の一員として生き生きと働いています。朝、「おはよう!」と出勤してくる時の笑顔をもっともっと増やしてあげたいと思います。

(手をつなぐ育成会会長・よかたん豆腐店工場長
楯 篤雄)

神山小学校で手話教室を開きました

11月2日(金)神山小学校の4年生の授業にお招きを受け、遊佐良樹さんと一緒に、手話のことはお話しして来ました。「今日は、いつ緊張するのかなあ...」と考える私の隣で、「朝からずっと緊張してるよ~」と繰り返す良樹さん。その授業のテーマは「相手のことを思いながら、手話にチャレンジしよう!」というもので、12人の子どもたちは、事前に考えた質問を手話の本で調べ、良樹さんに手話で質問をしました。



通訳なしで、質問と回答がスムーズに成立するグループもあれば、調べた表現では伝わらず、何度もやりとりをするグループもありました。始めのうちは、恥ずかしがって、手の動きが小さかったり、弱かった子どもも、次第に表情や手の動きが大きくなり、良樹さんとの会話がスムーズにいくようになって、ほっとしている様子でした。手話への感心が高く、また、手話を使う良樹さんとの会話への意欲が強く、おまけに私は結局緊張せずで、楽しい授業でした。この島では、障害を持たない人(子どもも大人も)が、障害を持つ人と接したり、会話をするのが少ないと感じます。授業という設定された場面でありましたが、良い機会だったと私は思いました。

(日高 冬子)

行事予定

餅つき大会(手をつなぐ育成会との交流会)

毎年、参加者が増えてきています。申し訳ありませんが、一家族2.5*までとさせていただきます。また、お手伝い出来る方を募集します。

日時 12月28日(金) 9時集合

場所 今年は「じゃがいものうち」です。

昼食はつきたての餅、ごった煮汁(中身、具の寄付大歓迎)

持ち物 エプロン、三角巾又はスカーフ、食器(箸、茶碗、コップ) もろ蓋(餅入れ)

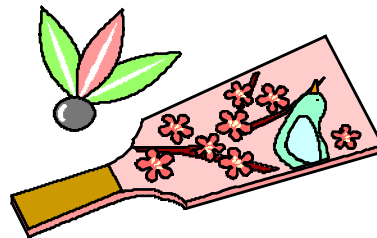


新春茶話会

日時 1月4日(金) 12時～3時頃

場所 「じゃがいものうち」

持ち物 一品持ち寄り、はし、器、飲み物



使用済み切手の収集について

貴重なご寄付を頂きありがとうございました。2006年度は、トン2,000万円になったそうです。

私の使用済み切手の収集の癖は、もう何十年にも及びます。そのきっかけはJOC S (日本キリスト教海外医療協力会)の会報「みんなで生きる」を読んでいて、消印の押された使用済み切手でもそれがたくさん集まれば、換金されて、発展途上国の子供達の予防接種の費用に充てられお役に立っていることを知った時からです。記念切手ばかりでなく、通常切手でも役に立ちます。ただ端っこが欠けたり汚れた物はダメだそうです。切手のまわりを0.5～1cmくらい残して切り取り、台紙に貼ったりしないでそのまま集めておいてください。私もお菓子箱に一杯になったら、前記JOC Sに送ります。すると必ずお礼状(はがき)が来ます。状況としては、以前ほどは手紙を書かない人が多くなって、集まり具合は減り気味なのだそうです。一人では何の役にも立たないことが大勢の人達の協力で、大きな事業につながるのです。ちょっとした心がけで出来る事でもあります。

ご面倒でしょうがこれからも引き続き会員のみなさ方にご賛同、ご協力いただけると大変うれしいです。私も「じゃがいものうち」のメンバーの一員です。どうぞよろしく願いいたします。

なお、書き損じの葉書や、外国のコイン、未使用の切手も歓迎です。区分してお捧げください。

(安房 桑山善右衛門)

喫茶コーナー

モットイナイ箱 「モットイナイ。もらってください。もちろん無料です。」
という箱がリサイクルコーナーの隅に置いてあります。

いい品なのにサイズが小さくて売れない衣類などが入っています。

皆さん、たくましく再利用してくれています。捨てないですむのは本当にありがたいことです。

あなたものぞいてみませんか。

リサイクル衣類が冬物バージョンになりました。ご利用下さい。



感謝録

松本裕子 岸トモ子 柴田八重子 石川ミナ子 日高弘子 須原光伸 元山由美 岩川絹子 北山照昭
有川洋子 大原貞子 菅嶋好子 池上まち子 日高典子 一湊珈琲 楯陽子 山田由紀子 金森マスマ
笹川知美子 福島史子 日高秀美 小川端則 小笠原勝弘 楯篤雄 鈴木裕子

ありがとうございました。

(9月13日～12月10日 敬称略)

編集後記

あれよあれよという間にもう師走、月日の経つのは早い早いものですね。屋久島は合併が出来、ついに屋久島町になりました、これからは上、下、と区別なく一つの屋久島として意識します、まだ慣れないせいかやたら屋久島が広く大きく感じるのは私だけなのでしょうか。屋久島の中には障害を持ち悩みを持っている方達が、少ないけれども今も尚確実に存在しています、これからも通信に新しい動きがあれば紹介して行きますのでご意見等ありましたらよろしく願いします。

(楯篤雄)